

乘潮發溢口。帶雪別廬山。湖に乗じて溢口を發し、雪を帯びて廬山に別る。

暮景牽行色。春寒散醉顏。暮景行色を牽き、春寒醉顔を散す。

共嗟炎瘴地。盡室得生還。共に嗟く炎瘴の地、室を盡して生還するを得たるを。

【字解】(一) 軍城。海陽、即ち江州を指す。(二) 祖帳。送別の宴席。(三) 溢口。海陽に在る川の名。(四) 行色。行旅の景況。(五) 炎瘴地。江州を指している。

【題義】海陽に離別の宴を設け、忠州に向つて去る時の情景を敘した詩である。

【詩意】鞍馬に跨つて海陽を出で、宴席に臨んで笙歌の聲を聴き、潮に乗じて溢口を舟出し、雪を戴いた廬山に別を告げて去らんとすれば、夕暮の景色が旅心を誘ひ、春の寒さが醉を醒す。海陽炎瘴の地に數年を送つたが、幸に家族一同生きて還るを得たことを共に嗟嘆した。

戲贈戶部李巡官

戲に戶部の李巡官に贈る

好去民曹李判官。好し去れ民曹の李判官、

少貪公事且謀歡。公事を貪ること少くして且つ歡を謀らん。

男兒未死爭能料。男兒未だ死せざること争でか能く料らん、

莫作忠州刺史看。忠州刺史の看を作すこと莫れ。

【字解】(一) 戶部。官署の名。戶口財賦を掌る。漢では民曹と謂つた。巡官は官名。唐では節度觀察、團練、防禦諸使には皆巡官あり、以て屬僚となす。位は判官、推官の次に在り。(二) 看。待遇すること、高

連の詩に不作三布衣とある。

【題義】戲に戶部の李巡官に贈つた詩である。

【詩意】李判官殿、やかましい事を言はないで往つてくれ。そんなに御役目大事に務めないで身の歡樂を謀らうではないか。人の身は明日をも知らぬ果敢ないものだ。あまり忠州刺史あつかひにはしてくれらな。

行次夏口先寄李大夫

行いて夏口に次り、先づ李大夫に寄す

連山斷處大江流。連山斷ゆる處大江流る、

紅旆逶迤鎮上游。紅旆逶迤として上游を鎮す。

幕下翱翔秦御史。幕下に翱翔す秦の御史、

軍前奔走漢諸侯。軍前に奔走す漢の諸侯。

曾陪劍履升鸞殿。曾て劍履に陪して鸞殿に升り、

欲謁旌幢入鶴樓。旌幢に謁して鶴樓に入らんと欲す。

假著緋袍君莫笑。假に緋袍を着るも君笑ふ莫れ、

恩深始得向忠州。恩深くして始めて忠州に向ふを得たり。

【字解】(一) 紅旆。將軍の旗。逶迤は曲く繞る。上游は水の上流の地。(二) 翱翔。奔走服事すること。秦。御史は節度判官などないふ。(三) 鸞殿。門下省をいふ。(四) 旌幢。旗。李大夫を旌に比していふ。鶴樓は黃鶴樓。湖北省武昌縣の西南に在り、昔黄文禱が登仙し黃鶴に乗つて鶴ひし處である。(五) 緋袍。刺史の服。

律詩 戲贈戶部李巡官 行次夏口先寄李大夫



【題義】忠州に赴任する途中、夏口（今の湖北省武昌縣の西）に次り、面謁する前に先づ節度使たる御史大夫李公に寄せた詩である。

【詩意】連山の断えた處を長江が滔滔として流れてゐる。その上流の地に君は節度使として鎮護してゐる、して其幕下には數多の屬僚や地方長官などが奔走服事してゐる。私も嘗て君に陪して門下省に奉職した事もあつた。その緣故で、黃鶴樓に入つて面謁を賜はりたいと存じてゐる。假に刺史の服を着て往きますから、どうぞ笑はないで下され。やつと聖天子の御恩に浴して忠州刺史になりましたから。

重贈李大夫

重ねて李大夫に贈る

早接清班登玉陛。早く清班に接して玉陛に登り。  
同承別詔直金鑾。同く別詔を承けて金鑾に直す。  
鳳巢閣上容身穩。鳳は閣上に巢ひて身を容るること穩に。  
鶴鏤籠中展翅難。鶴は籠中に鏤されて翅を展ぶること難し。  
流落多年應是命。流落多年應に是れ命なるべし。  
量移遠郡未成官。遠郡に量移せられて未だ官を成さず。

【字解】【一】清班。清貴の官。玉陛は官殿。【二】別詔。特別の詔。金鑾は翰林院。直は宿直する。【三】鳳。李大夫に比す。【四】鶴。樂天自ら比す。【五】量移。罪を以て遠地に貶せられた者が赦に遇うて近地に移されること。遠郡は忠州を指す。【六】慙。感謝する意。慙悵は復せ衰へた身。樂天自ら謂ふ。欺は侮る

意。【七】銀臺。翰林院をいふ。

慙君獨不欺憔悴。慙づ君が獨憔悴を欺かず、猶作銀臺舊眼看。猶銀臺舊眼の看を作すに。

【題義】重ねて李大夫に贈つた詩である。

【詩意】早く君と相前後して宮殿に登り、又同じく別詔を承けて翰林學士となつたが、君は永く宮閣に仕へてめきめきと昇進し、私は貶謫の憂目に遇うて自由もきかぬ身になつた。かくて久しく江州に流落してゐたが是れも天命で致方もない。此度忠州に量移せられたがまだ赴任の途中で本官にはならないのに、君が尾羽打ち枯らした私を馬鹿にもせず、翰林學士たりし昔のやうにあしらつてくれたことは、誠に感謝に堪へない。

對鏡吟

對鏡吟

閒看明鏡坐清晨。閒に明鏡を看て清晨に坐す。  
多病姿容半老身。多病の姿容半老の身。  
誰論情性乖時事。誰か論せん情性の時事に乖くを、  
自想形骸非貴人。自ら想ふ形骸の貴人に非ざるを。  
三殿失恩宜放棄。三殿恩を失ふ宜く放棄せらるべし、

【字解】【一】誰論。何ぞ論ぜんといふ意。【二】形骸。容貌なり。【三】三殿。麟德殿をいふ。一殿にして三面ある故なり。ここは唯宮殿の意と見る可とす。【四】九宮。九星なり、推命は星まほりを見て吾が運命を推測すること。【五】如今



九宮推命合漂淪。九宮命を推す合に漂淪すべし。

如今所得須甘分。如今得る所須らく分に甘んずべし。

腰佩銀龜朱兩輪。腰に銀龜を佩びて兩輪を朱にす。

【題義】鏡に對して吾が姿を寫し、因つて其感想を述べた詩である。

【詩意】朝鏡を把つて老病の身を寫して見た。吾が性質が時流に合はないことは今更言ふまでもないが、一體吾が人相が貴人にはなれない相である。殿中に仕へて君恩を失つたからには放棄せられるのは當然で、九星から吾が運命を推定しても淪落すべき筈である。されば今日の境遇に對しては決して不足を言ふべきではない。忠州刺史となつて腰には銀魚袋を佩び朱塗の車に乗れるのであるから。

今。【三】銀龜。銀魚袋なり。官吏の腰に佩ぶるもの。因事紀聞に「唐時品官もと魚袋を佩ぶ。則天の時改めて龜となす」とある。

江州赴忠州至江陵以來舟中示舍弟五十韻

江州より忠州に赴くとき、江陵に至りてより以來、舟中にて舍弟に示す五十韻

昔作咸秦客。常思江海行。昔咸秦の客と作り、常に江海の行を思ふ。

今來仍盡室。此去又專城。今來りて仍室を盡し、此を去りて又城を專にす。

典午猶爲幸。分憂固是榮。典午も猶幸と爲す、分憂は固より是れ榮。

簞篋州乘送。艤牒驛船迎。簞篋州乗送り、艤牒驛船迎ふ。

共載皆妻子。同遊即弟兄。共に載するは皆妻子、同く遊ぶは即ち弟兄。

寧辭浪迹遠。且貴賞心并。寧ぞ辭せんや浪迹の遠きを、且貴ぶ賞心の并するを。

雲展帆高挂。颺棹棹迅征。雲展して帆高く挂り、颺馳して棹迅く征く。

泝流從漢浦。循路轉荆衡。流に泝りて漢浦從りし、路に循ひて荆衡に轉ず。

山逐時移色。江隨地改名。山は時を逐ひて色を移し、江は地に隨ひて名を改む。

風光近東早。水木向南清。風光は東に近づきて早く、水木は南に向ひて清し。

夏口煙孤起。湘川雨半晴。夏口煙孤り起り、湘川雨半晴る。

日煎紅浪沸。月射白砂明。日煎りて紅浪沸き、月射て白砂明かなり。

北渚寒留雁。南枝暖待鶯。北渚寒くして雁を留め、南枝暖にして鶯を待つ。

駢朱桃露萼。點翠柳含萌。朱を駢べて桃は露を露し、翠を點じて柳は萌を含む。

亥市魚鹽聚。神林鼓笛鳴。亥市魚鹽聚り、神林鼓笛鳴る。

壺漿椒葉氣。歌曲竹枝聲。壺漿椒葉の氣、歌曲竹枝の聲。なるを愛す。

繫纜憐沙靜。垂綸愛岸平。纜を繫ぎて沙の靜かなるを憐み、綸を垂れて岸の平か

水餐紅粒稻。野茹紫花菁。水には紅粒の稻を餐ひ、野には紫花の菁を茹ふ。



甌汎茶如乳。臺粘酒似餒。  
 膾長抽錦纒。藕脆削瓊英。  
 容易來千里。斯須進一程。  
 未曾勞氣力。漸覺有心情。  
 臥穩添春睡。行遲帶酒醒。  
 忽愁牽世網。便欲濯塵纓。  
 早接文場戰。曾爭翰苑盟。  
 掉頭稱俊造。翹足取公卿。  
 且味隨時義。徒輸報國誠。  
 衆排恩易失。偏壓勢先傾。  
 虎尾憂危切。鴻毛性命輕。  
 燭蛾誰救活。蠶繭自纏縈。  
 斂手辭雙闕。回眸望兩京。  
 長沙拋買誼。漳浦臥劉楨。

甌に汎びて茶は乳の如く、臺に粘して酒は餒に似たり。  
 膾長くして錦纒を抽き、藕脆くして瓊英を削る。  
 容易く千里に來り、斯須一程を進む。  
 未だ曾て氣力を勞せず、漸く心情有るを覺ゆ。  
 臥すこと穩かにして春睡を添へ、行くこと遅くして酒醒。  
 忽ち愁ふ世網に牽かるるを、便ち塵纓を濯はんと欲す。  
 早く文場の戰に接し、曾て翰苑の盟を争ふ。  
 頭を掉ひて俊造と稱せられ、足を翹げて公卿を取らんとす。  
 且つ時に隨ふ義に味く、徒に國に報ゆる誠を輸す。  
 衆排して恩易く易く、偏壓せられて勢先づ傾く。  
 虎尾憂危切に、鴻毛性命輕し。  
 燭蛾誰か救活せん、蠶繭自ら纏縈す。  
 手を斂めて雙闕を辭し、眸を回らして兩京を望む。  
 長沙買誼を抛ち、漳浦劉楨を臥せしむ。

鷓鴣鳴還歇。蟾蜍破又盈。  
 年光同激箭。鄉思極搖旌。  
 潦倒親知笑。衰羸舊識驚。  
 烏頭因感白。魚尾爲勞頰。  
 劍學將何用。丹燒竟不成。  
 孤舟萍一葉。雙鬢雪千莖。  
 老見人情盡。閒思物理精。  
 如湯探冷熱。似博鬪輸贏。  
 險路應須避。迷塗莫共爭。  
 此心知止足。何物要經營。  
 玉向泥中潔。松經雪後貞。  
 無妨隱朝市。不必謝寰瀛。  
 但在前非悟。期無後患嬰。  
 多知非景福。少語是元亨。

鷓鴣鳴きて還た歇み、蟾蜍破れて又盈つ。  
 年光激箭に同く、郷思搖旌を極む。  
 潦倒して親知笑ひ、衰羸して舊識驚く。  
 烏頭感に因りて白く、魚尾勞の爲に頰し。  
 劍を學ぶも將た何ぞ用ひん、丹燒けども竟に成らず。  
 孤舟萍一葉、雙鬢雪千莖。  
 老いて人情を見て盡し、閒に物理を思うて精し。  
 湯に冷熱を探るが如く、博して輸贏を鬪はしむるに似たり。  
 險路應に須らく避くべし、迷塗共に争ふこと莫れ。  
 此心に止足を知る、何物か經營を要せん。  
 玉は泥中に向ひて潔く、松は雪後を経て貞し。  
 朝市に隱るるを妨ぐる無し、必ずしも寰瀛を謝せず。  
 但前非を悟るに在り、後患に嬰ること無きを期す。  
 知ること多きは景福に非ず、語ること少きは是れ元亨。



晦即全身藥、明爲伐性兵。  
 昏昏隨世俗、蠢蠢學黎毗。  
 鳥以能言構、龜緣入夢烹。  
 知之一何晚、猶足保餘生。

【釋】 晦は即ち身を全くするの藥、明は性を伐るの兵たり。昏昏として世俗に隨ひ、蠢蠢とし黎毗を學ぶ。鳥は能く言ふを以て構せられ、龜は夢に入るに縁りて烹し、之を知る一に何ぞ晚き、猶餘生を保つに足る。

【字解】 【一】 成秦 長安。秦の咸陽の地なればなり。 【二】 專城 刺史となること。 【三】 典午 司馬をいふ。 【四】 分憂 刺史をいふ。 【五】 盤置 車の屏蔽なり。州乘は州の車。 【六】 樓船 船の名。 【七】 孤蓬 行蹤の定なきをいふ。 【八】 賞心 心の歡樂をいふ。 【九】 雲展 雲の如くのぶること。 【一〇】 隨風 風の如く走る。 【一一】 漢浦 漢水のほとり。 【一二】 荆街 荆州、衡州。 【一三】 夏口 今の湖北省武昌縣の西。 【一四】 湘水 湘水。 【一五】 支市 支の日に開く市。 【一六】 神林 神社の森。 【一七】 竹枝 土俗を歌ふ詩。 【一八】 垂輪 釣絲を垂れる。 【一九】 瓊英 美玉。 【二〇】 酒醒 酒に酔ふこと。 【二一】 塵腰 汗れた冠の紐。 【二二】 文場 進士の試に應じたこと。 【二三】 輪苑 文人の仲間入りをしたこと。 【二四】 後遺 禮記に「郷に命じ秀士を論じて之を司徒に升せしむるを選士といひ、司徒選士の秀なる者を論じて之を學に升するを俊士といひ、司徒に升せらるる者は郷に征かす、學に升せらるる者は司徒に征かす、之を選士といふ」と。 【二五】 性命 生命なり。 【二六】 燭銀 火中に飛び込む蟲。 【二七】 雙闕 宮殿。 【二八】 兩京 洛陽、長安。 【二九】 賈誼 漢の文帝に仕へて寵あり。讒に由りて長沙王の太傅に貶せらる。 【三〇】 劉楨 建安七子の一。嘗て曹操の子丕に従つて飲む。酒酣なるとき丕夫人甄氏に命じて出で拜せしむ。坐中皆伏す。楨獨り平視す。操之を聞き乃ち收めて罪を治む。 【三一】 鷓鴣 鷓鴣。 【三二】 秋至 秋至れば此鳥鳴く。 【三三】 蟾蜍 月をいふ。 【三四】 凌倒 零落する貌。 【三五】 烏頭 黒髪。 【三六】 丹燒 仙藥を鍊る。 【三七】 博奕 輪贏は勝敗。 【三八】 迷塗 迷へる道。 【三九】 止足 老子に「足ることを知れば辱められず、止ることを知れば殆からず」とある。 【四〇】 寰瀛 世間。 【四一】 景福 大なる幸福。 【四二】 元亨 大通なり。幸福なこと。 【四三】 晦 智をくらます。 【四四】 伐性兵 兵は刃物。韓詩外傳に「徵幸は性を伐るの斧なり」とある。 【四五】 昏昏 暗きこと。 【四六】 晦 智をくらます。 【四七】 伐性兵 兵は刃物。韓詩外傳に「徵幸は性を伐るの斧なり」とある。 【四八】 昏昏 暗きこと。

【題義】 江州から忠州に赴任する時、既に江陵（湖北省荊州府治）を過ぎ、長江を遡る舟中で此詩を作り、弟行簡（樂天の作つた三遊洞序に據れば舍弟は行簡であることが明かである）に示したといふのである。五十韻は即ち百句。

【詩意】 昔長安に客寓してゐた頃は、江海の間に旅して見たいものだとも思つたが、今既に一家を擧げて江州に來り、又此を去り刺史となつて忠州に赴任することになつた。江州に司馬（官名）となつてゐたのさへ幸福だと思つてゐたのに、刺史となるとは非常な光榮である。經る所の州縣では舟や車で送迎してくれ、妻子兄弟相攜へての旅であるから、漂流の遠きも敢て厭はず、心の樂みを俱にするのを喜んでゐる。船の進みも速かに江流を沂つて漢浦荆衡を歴れば、山は時に因つて色が變り、江は土地の異ると共に名も變り、景色は東に近寄るほど早く、水や木は南に向いてゐるほど清い。夏口のあたりには孤煙が立ちのぼり、湘水のあたりは雨が半晴れてゐる。日が射しては波が紅になり、月が射せば砂が白く見え、北岸は寒くして雁を留めて居るが、南岸の樹は鶯を待ち顔である。桃の蕾が紅を露し、柳の芽が緑を呈し、濱邊の市には魚鹽が聚り、社の森には笛太鼓が賑かである。汁を吸へば山椒の香が深く、歌を聴けば土地風を味ふことが出来る。船を泊しては沙の靜かなるを愛し、釣を垂れては岸の平なるを愛し、稻梁の飯や紫花の菁を食ひ、乳の如き茶や鰯の如き酒を飲み、錦絲の如き脣や玉を割くが如き連根を賞味し、既に千里を過ぎ來りて更に一日程を進めた。格別氣力も費さな



いかに益、興味の深きを覺え、穩かに臥して春睡を貪り、酔うて船の進みが遅くなつた。ふと世上の煩累を愁へ官を辭して隱退しようかなどと思つた。回顧すれば早く進士の試験に應じて及第し。頭を掉つて俊士とか造士とか稱讃され、手に唾して卿相の位に登ることも出来る。自負してゐた。併し徒に報國の志ばかり厚くて時俗に隨ふことを知らなかつたので、忽ち衆人の排撃を招き、虎の尾を踏むやうな危険にも遇ひ、身命の輕きは鴻毛にも比すべき状態になつた。飛んで火に入る蟲と同じだから誰あつて救つてはくれず、蓋が自ら藪を作つて吾と吾が身を閉ぢ籠めるのと同じやうなはめになつた。因つて謹慎して宮闈を辭し兩京を回望しながら貶處に遷り、賈誼が長沙に貶せられ、劉楨が漳浦に流されたやうであつた。歲月の移ることは箭よりも速く、懷郷の情は風に飄る旗のやうであつた。老衰零落して人の笑草になり、黒髪も愁の爲に白くなり、苦勞の爲に赤くなつた魚尾と同様であつた。(魚が勞苦すれば其尾が赤くなるといふこと詩經に見ゆ)嘗て劍を學んでも何の役にも立たず、丹は焼いて見たが是も失敗に終つた。老いて人情の機微を悟り靜かに物の道理を考へ、湯の冷熱を探り博して勝敗を争ふ如く、すべて慎重な態度を取つて險路を避け名利を争はぬことにした。心に止足を知りさへすれば何も汲汲として求むる所はない。玉は泥の中に在つても潔く、松は雪の後にも緑を變へない。大隱は市に隱るといふから、敢て世間を引退するにも及ぶまい。ただ前非を悟り後の禍に罹らぬやうにしよう。智多きは身の幸ではなく、語少きこそ幸である。暗黙は身を全うする薬で、明智は性を戕ふの刃である。黙黙として世俗に隨ひ蠢蠢として愚民に倣つてゐるがよい。鸚鵡は能く言

ふので人の爲に縛られ、龜はトに供せられるので烹られるのだ。かう悟つて見れば既に晚かつたとも思ふが、併しまだ今後之餘生を全うするには足りる。

【餘論】唐宋詩辭に「議論と敘事と相間へて行る。才氣瀾翻潮湧し、一筆掃ひ就す」と評してある。

題岳陽樓

岳陽樓に題す

岳陽城下水漫漫

岳陽城下水漫漫

【字解】(一) 漫漫 廣き貌。

獨上危樓凭曲欄

獨り危樓に上りて曲欄に凭る。

【二】 危樓 高樓なり。

春岸綠時連夢澤

春岸綠なる時夢澤に連り、

【三】 夢澤 雲夢澤。大澤の名。

夕波紅處近長安

夕波紅なる處長安に近し。

猿攀樹立啼何苦

猿は樹を攀ちて立ち啼くこと何ぞ苦き、

鴈點湖飛渡亦難

鴈は湖に點じて飛び渡ること亦難し。

此地唯堪畫圖障

此地唯障に畫圖するに堪へたり、

華堂張與貴人看

華堂に張り貴人に與へて看しめん。

【三】 華堂 華美な堂。

【題義】

岳陽樓(湖南省岳陽縣城の西門の上に在り、洞庭湖を下瞰し風景絶佳なり)に題した詩である。

律詩 題 岳陽樓



【詩意】岳陽の城下には洞庭の湖水が漫漫として廣がつてゐる。吾は獨り岳陽樓に上り欄干に凭つて展望した。時正に春であるから岸草緑にして遠く雲夢澤に連り、夕波の紅なるを見て長安の近くなつたやうに思はれる。樹上に啼く猿の聲は悲しげで、湖水に飛び込む鴈は去り難げである。此地の風景は屏障に畫いて華堂に張り、貴人の賞玩に供すべき價値がある。

入峽次巴東

峽に入り巴東に次る

不知遠郡何時到、知らず遠郡何時にか到らん、  
猶喜全家此去同、猶喜ぶ全家此を去る同きを。

萬里王程三峽外、萬里の王程三峽の外、  
百年生計一舟中、百年の生計一舟の中。

巫山暮足露花雨、巫山暮に足る花を露すの雨、  
隴水春多逆浪風、隴水春多し浪に逆ふ風。

兩片紅旌數聲鼓、兩片の紅旌數聲の鼓、  
使君樓船下巴東、使君の樓船下巴東に上る。

【題義】船江を舫つて三峽に入り、巴東（今の湖北省巴東縣大江の北岸）に次つた時の詩である。

【字解】（一）遠郡 忠州を指す。

（二）王程 王の爲の務の旅程。三

峽は羅塘峽・巫峽・西陵峽をいふ。三

峽の中長さ七百里。兩岸の連山斷ゆる處なし。江水峽の束ゆる所となり

舟行甚だ險なり。

（三）百年 人の一生をいふ。生計

は活計といふが如し。

（四）隴水 川の名。

（五）使君 刺史。樂天自ら謂ふ。

樓船は舟の名。

【詩意】江上路遠く何日忠州に到着するかも知れぬほどであるが、一家擧つて同行するだけは誠に嬉しい。既に萬里の水程を歴て三峽に入り、一生の資財を盡く舟中に藏めてある。巫山のあたりは夕に雨が降つて花を露し、隴水が増して風浪が逆捲いてゐる。吾が乗れる舟はかかる險難を凌ぎ、二本の紅旌を建て鼓を鳴らして、今や方に巴東を上つて行く。

十年三月三十日別微之於灑上十四年三月

十一日夜遇微之於峽中停舟夷陵三宿而別

言不盡者以詩終之因賦七言十七韻以贈且

欲記所遇之地與相見之時爲他年會話張本

也

十年三月三十日、微之に灑上に別れ、十四年三月十一日夜、微之に峽中に遇ひ、舟を夷陵に停め、三宿して別る。言の盡さざる者は詩を以て之を終へんとす。因つて七言十七韻を賦して以て贈り、且つ遇ふ所の地と相見の時とを記し、他年會話の張本となさんと欲するなり

灑水店頭春盡日、灑水の店頭春盡くる日、

【字解】（一）灑水 灑は陝西省

律詩 入峽次巴東 十年三月三十日別微之於灑上



送君上馬謫通川。君が馬に上りて通川に謫せらるるを送る。  
 夷陵峽口明月夜。夷陵峽口明月の夜、  
 此處逢君是偶然。此處君に逢ふ是れ偶然。  
 一別五年方見面。一たび別れて五年方に面を見、  
 相攜三宿未廻船。相攜へて三宿未だ船を廻さず。  
 坐從日暮唯長歎。坐して日暮從り唯長歎し、  
 語到天明竟未眠。語りて天明に到りて竟に未だ眠らず。  
 齒髮蹉跎將五十。齒髮蹉跎將に五十ならんとす、  
 關河迢遞過三千。關河迢遞三千に過ぐ。  
 生涯共寄滄江上。生涯共に寄す滄江の上、  
 鄉國俱拋白日邊。鄉國共に拋つ白日の邊。  
 往事渺茫都似夢。往事渺茫都て夢に似たり、  
 舊遊零落半歸泉。舊遊零落半泉に歸す。  
 醉悲灑淚春杯裏。醉悲して涙を灑ぐ春杯の裏、

の秦嶺より出で西北流して長安を經  
 渭河に注ぐ。  
 【一】 通川 通州なり。  
 【二】 蹉跎 つまづく調。  
 【三】 迢遞 遠なる貌。  
 【四】 滄江 蘇の江水。大江を指す。  
 【五】 舊遊 舊友。零落は死亡する  
 こと。  
 【六】 龍鍾 潦倒失意をいふ。惡官  
 職は龍鍾なり。

吟苦支頤曉燭前。吟苦頤を支ふ曉燭の前。  
 莫問龍鍾惡官職。問ふ莫れ龍鍾惡官職、  
 且聽清脆好詩篇。且つ聽く清脆好詩篇。

【七】 龍鍾 潦倒失意をいふ。惡官  
 職は龍鍾なり。

別來只是成詩癖。別來只是れ詩癖を成す、  
 老去何曾更酒顛。老い去つて何ぞ曾て更に酒顛せん。  
 各限王程須去住。各の王程を限りて須らく去住すべし、  
 重開離宴貴留連。重ねて離宴を開きて留連を貴ぶ。  
 黃牛渡北移征棹。黃牛渡北征棹を移し、  
 白狗崖東卷別筵。白狗崖東別筵を卷く。

【八】 酒顛 酒の爲に狂すること。  
 【九】 王程 王の務の爲にする旅程。  
 去住は去る意。住は帶説にて意味な  
 し。

神女臺雲閒繚繞。神女の臺雲閒にして繚繞、  
 使君灘水急潺湲。使君の灘水急にして潺湲。  
 風淒暝色愁楊柳。風淒くして暝色楊柳愁へ、

【一〇】 神女臺 巫山の神女を祀れる  
 臺。  
 【一一】 使君灘 虎骨灘なり。楊亮益  
 州刺史となり此に至つて舟覆る。蜀



月弔宵聲哭杜鵑。月弔ひて宵聲杜鵑哭す。  
 萬丈赤幢潭底日。萬丈の赤幢は潭底の日、  
 一條白練峽中天。一條の白練は峽中の天。  
 君還秦地辭炎徼。君は秦地に還りて炎徼を辭し、  
 我向忠州入瘴煙。我は忠州に向ひて瘴煙に入る。  
 未死會應相見在。未だ死せずんば會す應に相見ることあるべし、  
 又知何地復何年。又知らんや何の地復た何の年なるを。

人因つて使君灘といふ。潭は水に流るる聲。  
 【一】赤幢 赤き旗。  
 【二】秦地 長安に近き地。嶺州を指す。炎徼は炎熱の地。  
 【三】瘴煙 炎熱にして惡氣の深き地。

【題義】 元和十年三月三十日に元稹に灑水の上で別れて後、同十四年三月十一日の夜に峽中で遇つた。  
 (樂天は江州から忠州に赴任する途中、元稹は通州司馬から虢州長史に轉任して其赴任の途中である。) 因つて舟を夷陵(湖北省宜昌縣の西北下牢戍の地)に停め三泊して別れたが、尙語り盡さぬ所を此詩を以て述べ、後日の語草に供するといふのである。

【詩意】 君が通州に貶せられて行くのを送つて、三月の三十日に灑水の邊の酒屋で別れたが、今夷陵で明月の夜に偶然君に逢つた。一別以來五年ぶりで顔を見たので、相別るるに忍びずして、三宿し、夕方から夜明けまで眠らずに語り續けた。お互に志成らずして將に五十ならんとし、遙遙三千里外

と、請居し、往事を憶へば總て夢の如く、舊友も半は黃泉の客となつた。因つて共に酒を酌みつつ晩燭の前に涙を絞つた。官職の卑いことなどは措いて問はずに、ただ君の詩の清麗なるを聴かう。僕も君に別れてからは詩にばかり耽つて、老いては酒に狂することもなくなつた。各、日程が限られてゐるのだから早く去るべきであるが、重ねて離宴を開いて別を惜んだ。見れば神女臺には靜かに雲が繞り使君灘は流が急である。夕日が江水に寫つて萬丈の赤旗の如く、峽中の天は一筋の白布のやうである。君は此から故郷の近くに往くのであるが、我は炎瘴の地に向ふのである。併し永らへてゐれば又必ず相逢ふ事があるであらう。唯其れがいつの事か何處であるかがわからないだけの事だ。

題峽中石上

峽中の石上に題す

巫女廟花紅似粉。巫女廟の花粉よりも紅に、  
 昭君村柳翠於眉。昭君村の柳眉よりも翠なり。  
 誠知老去風情少。誠に老い去りて風情の少きを知るも、  
 見此爭無一句詩。此を見て争か一句の詩無からん。

【字解】 【一】 巫女廟 巫山の神

女の廟。

【二】 昭君村 王昭君の生れた村。

【題義】 峽中の石に題した詩である。

律詩 題峽中石上



【詩意】巫女廟の花は紅粉よりも紅に、昭君村の柳は眉よりも緑である。老いて詩情が枯れたことは自ら承知してゐるが、此景色を見ては一句なかるべからずである。

巫女廟の花は紅粉よりも紅に

昭君村の柳は眉よりも緑である

老いて詩情が枯れたことは自ら承知してゐるが

此景色を見ては一句なかるべからずである

白樂天の詩集、卷十七、七七〇。此詩は、作者の老境に於て、自然の景色を詠じて、その美しさを賞讃するものである。詩の前半は、巫女廟の花の紅と昭君村の柳の緑を、それぞれに紅粉と眉とを以て比喩し、その美しさを強調している。後半は、作者の老境に於て、詩情が枯れたことを自ら承知しているが、この景色を見ては、一句もなかるべからずである、と述べている。これは、作者の老境に於て、自然の美しさを賞讃する気持ちが、詩情の枯れを補つて、再び詩を詠むに至ることを示している。



終

